

清流

題字：芳野 充

令和8年2月28日

第110号

発行所 加来不動産(株)

発行者 加来 寛

北九州市小倉南区守国本町1-12-23

穏やかに
静かに
清流のように

言葉を大切にえらぶ

「言葉は包丁と同じ」。わたしはそう思っています。

包丁も正しい知識技術と思いやりをもって使えば、おいしい料理をつくり食べる人によるこんでもらえます。一方で、使う人が変われば人を傷つける道具にもなります。言葉も同じです。たった一言で、人の印象は一瞬にしてかわってしまいます。

先日、そのことを体験するできごとがありました。あるセミナーに参加したあと、その会社のサービスを導入するかどうか検討していました。担当の営業の方はとても紳士的でこちらによりそった提案をしてくれて、好印象をもっていました。後日その会社の上司の方のお話も聞く機会がありました。

他社の事例をもちいて説明してくださいだったので、その際に他社の担当者「あいつ」と呼んだのです。もしかすると、場を和ませようとしたのかもしれませんが。冗談のつもりだったのかもしれませんが。しかしわたしは、お客様を「あいつ」と呼ぶ会社に、大切なことをお願いしようとは思えませんでした。どんなに良いサービスであっても、導入は見送ることにしました。

今回の一件は、わたし自身が直接傷つけられたわけではありません。けれども、その場にはいない第三者を軽んじる言葉は、その人自身だけではなく、会社の品位や信用までも下げてしまう。そう強く感じました。

一方で、言葉によって救われた経験もあります。仕事でおおきく落ちこみ気持ちが重くなったとき、妻に弱音をこぼしました。正直、「情けない！」と叱られると思っていました。しかし妻はこう言いました。「大変かもしれないけど、むしろ良くなるんじゃない。大丈夫よ」。その瞬間、重かった気持ちがふっとかるくなり、心が前を歩いたのが分かり、妻の存在がとても有難く感じられました。

このことから言葉には、人を支える力があるのだと実感しました。何気なく口にする言葉が、知らず知らずのうちに誰かを傷つけたり、不快さを与えたり、あるいは信用さえ失うこともある。言葉は、その人の人間性をうっしだします。頼や尊敬を生むこともある。言葉は、その人の人間性をうっしだします。だからこそ日ごろから自分の言葉に意識をむけ、言葉を大切にえらんでいきたい。人間関係を良くも悪くもするのは、ほんの一言なのではないでしょうか。

加来 寛

